

Re-considering Transpersonal Caring Theory and Practice

Where the personal and professional caring meet and transcend
for new models of health and healing

トランスパーソナルケアリング理論と実践の再考

Jean Watson

はじめに

日本赤十字広島看護大学の開学式という特別な機会に、ご招待を頂き真に光栄に存じます。そして皆様方と共に、お祝いでできます栄誉を承り、心から感謝申し上げます。この平和都市広島でヒューマン・ケアリングを教育理念とした看護大学の開学は、私達すべてにとって大きな喜びであり、大変意義深いことと存じます。今、ここで55年前、人類の堪え難い苦悩を経験された方々に謹んで哀悼の意を捧げます。

この日本赤十字広島看護大学はヒューマン・ケアリングを追及し、永遠のシンボルとして、立ち上がりました。日本の看護学の新しい時代を先導し、ケアリングの科学、哲学、理論、そして実践を、教育と研究に取り入れ、新しい学問的モデルを構築していかれることに対して、敬意を表すると共に、多いに期待致します。また、看護に対する高い理想に身を尽くし、世界的に大きな役割を果たそうとしている福岡文昭学長に心から拍手を贈ります。そしてこの輝かしい、未来に向けて知的冒険のパートナーである教職員、学生、そして皆様方のますますのご発展とご成功をお祈りいたします。

私は、ヒューマン・ケアリングセンターの老家でもある米国コロラド州デンバー市に位置するコロラド大学保健科学センター、看護学部から参りました。首都デンバーは、コロラド山脈の懷に抱かれています。このロッキー山脈の分水嶺は北米大陸を東西に分け、山頂から生命の源である水を東側は大西洋へ、西側は太平洋へと注いでいます。この点で、分水嶺は分岐点であるとともに、接合点でもあると思います。私は、雄大なコロラド山脈の大自然の中に、精霊の世界と物質の世界との分岐点、かつ接合点があ

ると考えています。そして、「内省的」観点から、ロッキー山脈の分水嶺を、比喩的にアメリカ大陸をつなげるもの、「生」と看護学の「意識」をつなげるもの、また、ヒューマン・ケアリングと生命の要素とをつなげるもの、接合するものと捉えています。

癒しの輪について

最初に、アメリカインディアン固有のシンボルである「癒しの輪」をご紹介します。この「癒しの輪」というのは、宇宙の7つの方向に私たちを導くものです。これはまた、古来から未来への健康と癒しのケアリングモデルを示すものです。

この方向には、①北：地、古代からの土地と人々、私達の祖先、②南：火、保護、エネルギー、情熱、③東：気、生命の息吹、魂、光、④西：水、生命の源、清浄、癒し、⑤空、⑥母なる大地、以上6つが挙げられます。では、7番目に聖なる方向を示しているのは、何でしょうか？私たち、それぞれが、7番目の聖なる方向の中央に位置しているのです。すべての生命の要素、健康とヒーリングを統合する、象徴的な聖なる方向を示しています。

新しい世紀にむけて、そして看護学の限りなき発展と前途に向けて、日本赤十字広島看護大学にこの癒しの輪をお贈り致します。

私的・専門的分水嶺について

分水嶺について、異なった観点から述べてみたいと思います。それは私の内面の分水嶺、すなわち非常に個人的な体験と、看護の専門家として考える分水嶺との接点であります。孫息子が、ゴルフクラブを振ったところに、私が知らずに庭に足を踏み入れ、

そのゴルフクラブで左眼を打つという全く思いも寄らなかった事故にありました。私は最愛の孫息子を非難の的に迫いやるという激しい苦悩と苦痛とを体験しました。

本日は、特に治癒不可能な病に冒された人への癒しと、私自身が今なお探究し続けているヒューマン・ケアリング／トランスパーソナル・ケアリングについてお話してみたいと思います。

「1997年、7月〇日、毎日毎日が日曜日」、暑く長い夏の間、固定枕に頭をうずめ、じっとうつ伏せで横になっていなければならないと知った時、私は日記の中にこう記していました。外科医は、私の傷は非常に重く、ベトナム戦争で負傷した兵士たちに匹敵するほどだ、と言いました。緊急手術の後、手術が成功するかどうか、視力を取り戻せるかどうか、決定するまで3カ月間も、頭を固定枕の中に入れ、絶対安静を強いられました。最初6週間、わずか15分間の休憩のみで、終日うつ伏せのままでした。その後も3ヶ月間、うつ伏せ状態で、じっと横になっていなければなりません。絶対安静が緩和されてからも、うつ伏せの状態は続きました。まるで、北欧神話の中に出てくるオーディンのように、逆さまに吊るされたようでした。しかし、私の視力は回復しませんでした。オーディンは、逆さまに吊るされた後、呪文をとこなえ知恵を見つけ出すことができました。私は未だに真実を捜し求めています。視力を取り戻せなかったまま、内科・外科治療は終了しました。けれど、私の癒しはこれからもずっと続いていきます。

失明した3ヶ月後に、私は夫を亡くしました。皆様方にとって、夫の死と比べると私の左眼の失明は、小さなことだと思われるかもしれません。しかし、夫にとっての私の苦痛は、彼が耐えうる以上のものでした。魂が彼を置き去りにしたのは、私がうつ伏せになって過ごした3ヶ月の間、私のそばで、つきっきりでケアしてくれた後のことでした。たった15分間の休憩のほかは、24時間彼に完全に依存しておりました。彼は誠心誠意つくしてくれました。そして私に永遠のすばらしい贈り物を残してくれました。それは、ケアを受ける側の体験を通して、私自身が提唱するケアリング理論を学ぶということでした。この悲劇より得た宝物から、私はいま、ケアリングと癒しについて、多くを語るできるようになりました。そして、繰り返し語っていくことによって、私自身、癒しの過程を積み重ねているのです。

ストーリーテリングについて

私たちが、自分自身のケアリングや癒しについて語るとき、個人として、そして専門家として培ってきたものを、再考する機会となります。他者の話に耳を傾けるという「ケアリング」は、私達が相手に与えることができる最高の贈り物です。それは、話す者と聴く者の両者が、お互いに与えると同時に、受けること、すなわち物語を共有することに他ならないからです。

物語り、すなわちストーリーテリングというのは、これまでの研究では思いもつかない方法で、人間の苦悩、ケアリング、愛情、共感、結びつきという人間の感情を探求する手助けになることが分かります。ストーリーテリングには、2つの側面があります。ひとつは、語るということ一話を分かち合うということ、もう1つは、自分自身と相手の話の内容を聴くということです。Ben Okri (1997) というナイジェリアの作家は、この2つのストーリーテリングの側面はとても楽しいことだと記述しています。なぜなら、最初の側面は私達を芸術的・創造的である人間の魂とを結びつけ、与えることの楽しさを提供するからです。与えることの楽しみから、私たちは謙虚さを学ぶことができます。第2の側面は、想像力を伴い、私たちは他者の経験を通して、自分の別の側面を見出すことができます。他者の話に耳を傾けながら、別の自分を見つめること、「それはどんなだろう」と想像することでもあり、これはあなた自身の物語でもあるのです。それ故、私たち自身の生や死をみつめることや、その人の状況を語り合うことから、より多くの知恵や理解を得ることができます。また、そこに共感が生まれるのです。ケアリングを学ぶことができ、他者にそれらを提供することができるのです。

ストーリーテリングの、他者の話に耳を傾ける事のもうひとつの重要な意義は、沈黙や心の解放、話を受容する喜びにあります。私たちは、心から耳を傾け、話を聴き、語ってもらえるという喜びから、実は自分自身について学び、人間性を深めているのです。話しをすること、話を聴くことは、どちらも喜びです。人間の体験から学ぶということは、看護の重要な特質です。話すことを通して体験を分かち合うことは、癒しを助長します。私の話を聴いてくださっている皆様方は、私の癒しと一緒に分かち合ってくださいているのです。私はそのことを深く感謝いたします。私は自分を癒し続けるために、憐れみの気持ちではなく、お祝いの気持ちで、皆様方

のところにやってきたのです。

内的な癒しとケアリング

トランスパーソナル・ケアリングについてのこの講演は、私だけのお話というのではなく、皆様方の、そして私達のお話でもあります。私のいくつか経験は、私たち全員の小さな経験として役立てることができると思います。このことは、また私にケアリングと癒しについて、より深い意味を教えてくれるものです。理論を超えた、ケアリングと癒しの核心となるものです。

ケアリング理論の内側から

もし私のお話を「現代」の医学や典型的な看護学に限ってみれば、皆様方は、私がすばらしい現代医学と看護の提供を受けてきたと考えるでしょう。お金で手に入れることのできる最新かつ最高の医学的治療を受け、高度で近代的な看護ケアを受けました。しかし、私も夫もそれによって治癒されることはありませんでした。

ケアリングと癒しは、機械的な手順にそった医学的ケアではなく、ヒューマン・ケアリングと医学的治療（キュアリング）とを統合したところに成り立つものです。それは、全体的・全人的ケア、すなわちヒーリングと癒しの語源である全体性＝神聖な、という意味を伴うものです。私が最も苦しいときに、私を癒し、安楽にしてくれたのは、トランスパーソナルなケアの瞬間であり、癒しの様式（ヒーリングアート）とも言うべきものでした。私に安心や安楽を与えてくれたのは、近代医学の粋を集めた技術ではなく、看護のケアリング様式でした。

看護のケアリングと癒しの様式

例えば、セラピューティックタッチは苦痛や苦悩を和らげます。アロマセラピーは、手術や麻酔の前後に不安を緩和し、気持ちを楽にしてくれます。瞑想することや、苦痛とともに生きている自分を視覚化することは、その痛みを受け入れ、苦難に立ち向かうことを学ぶのに役立ちます。他にも、エッセンシャルオイルによるマッサージ、詩や文学書を読んでもらうこと、音楽を聴くこと、曼荼羅を孫息子と一緒に描くこと、日記をつけることなどもケアリングに含まれます。家族や友人、そして世界中からの暖かいメッセージ、祈りの込められたカードや贈り

物を受け取ることによって、私は癒されました。自然の雄大さや美しさを思い浮かべることも癒しており、ケアリングそのものでした。

これらのヒューマン・ケアリングと癒しの過程は、私の魂に触れ感動を与えてくれました。こうした魂のケアこそ、もっとも大切なものであり、内面の癒しを促してくれました。魂のケアたる看護のケアリングと癒し（ヒーリング）は、看護研究に基づいたアートと、心と身体を統合したサイエンスに基づいています。目に見える外側の現象に目を向ける医学的治療では、なし得ません。それに対し、ケアリングとしての看護は、全体性、心—身体—魂の統一性に焦点をおきます。この様式は、画一的に適用されるものでなく、対象との関係性のなかで、ケアする者の「意識」によって生じてくるものです。

内面の癒し

最初、医師から頭をずっと下に向けていなければならないと言われたとき、受け入れ難い気持ちと羞恥心とに打ちひしがれました。しかし、その姿勢を続けているうちに、内面を見つめている自分に気がつきました。より静観的に瞑想するようになりました。うつ伏せになり自身の内的な世界を見つめることには、もう一つ、ひざまずくという意味合いが込められていることに気づきました。それに気づいたとき、羞恥ではなく、感謝の気持ちと、心の静寂を得ました。与えられた瞬間に、人生がもたらすすべてに対し、賞賛と謙虚さを持つことの大切さを学びました。私は、誇りと謙虚な気持ちを持ち、私より偉大なものに抵抗することをやめ、ひざまずくことを学びました。私は、孤独から逃避することより、偉大な神とつながりをもつことを学びました。そして事故によって、静穏でいること、立ち止まること、生のもたらす喜びと悲しみに抵抗することなく身を任せること、その瞬間瞬間を大切にすること、そして、「日々、区切りのない日曜日」の連続に身をゆだねることを学びました。ひとたび、人間が深い苦悩や悲嘆、孤独を経験したならば、苦しみ—悲しみ—喜びを同時に心の中で持ち合わせるほどの強さがあることを学びました。たいてい私たちは、人生の深淵や人間の魂について学ぶことより、苦悩や傷跡から顔を背けるものです。

立ち止まることや静穏でいることを学ぶことで、私はもっとも深く絶えがたい苦しみを見つめることができました。そして、そこから言い表せないほどの、愛と平穏を感じ得るようになりました。それは、

空間を通して、まるで魂が私に迫いつくように、より深いレベルでケアリングと癒しについて教えてくれるように感じました。

私は、また、経験しているのは痛みだけではないことに気づきました。暗闇の中でも、独りでなく、何百、もしくは何千という人たちの光に支えられている、ということに気がつきました。私はあふれるばかりの愛と祈りと、世界中から暖かい励ましを頂きました。これらは私の癒しのエネルギーとなり、私は、私がいま感じている痛みでさえも、皆様方とつながりを持っているのだ、ということを知りました。私の癒しを知ってくださった方々、私に愛情のこもったエネルギーをくださった方々に、心よりお礼を申し上げます。いま改めて、癒えていく傷に身をゆだね、今回の事故から受けた傷、怪我、そして喪失をも、“恵み”とを感じるようになりました。

トランスパーソナルケアリング／ ケアリング科学の視座

これらの経験は、これまでの型にはまったとおりの看護、現代の理論で固められた看護では、ケアすることはできないということを示唆しています。そして、私たちに新しい現実を目を向けるように促しています。この思いは、うつ伏せの状態になっていたときに、私の内面から湧き出てきたものです。苦痛や苦悩、絶えがたい痛みに耐えること自体の中に、人生における意義を見出す試みること、そこにおいて人間性を分かち合う可能性に目を向けるようになります。

トランスパーソナル・ケアリングの枠組みは、近代合理主義的な考え方や思考をはるかに越えています。その人の状況（周囲の世界）は、予期するとか、コントロールするというだけでは、十分に対処できないとの認識を前提にしています。複雑かつ無秩序、予測不可能である反面、無限の可能性や解放、一層の意味の探究に満ちあふれている世界の中で、病気や怪我、健康状態の危機にあるときであっても、生きる意味や恩恵を見つけ出そうと試みるのです。それは、いま、日本のここで、私達が経験している新たなパターンや関係を通して可能なのです。私が構築したヒューマン・ケアリング理論について、自分の私的な話を取りまぜ語るたびに、私は自分の人生と専門的に研究してきたケアについて再構築しているのです。そして皆様方は、私の学びと癒しの一部を担ってくれているのです。このように、私たちが受ける痛みや傷によって、私たちは、より癒され

るようになり、変容していくことができるのです。トランスパーソナルケアリングでは、このように考えるのです。

看護の領域では、身体的な安楽や苦痛の緩和のみでなく、心に深くかかわるケアリングと癒しの実践、及びそれを可能にする支援との関係性を築くことで専門職とされます。しかし、本当の意味で、これまで看護者は専門的訓練を十分に受けているとは言えません。ケアの専門職としての看護は、私たち自身がトランスパーソナルなケアについて、目のあたりにし、理解し始めたケアリング、癒しについて、学ぶ新しい見地からはじまるのだと考えます。

ケアリングの科学

ケアリングや癒しの過程と、健康と病気、生と死など深い人間の内面的・外面的経験との関係について、もう一度、考え直してみることが大切になります。そこではじめて、私たちは学問としてのケアリングモデルの重要性に気がつくようになります。現代のケアリングの科学と、癒しの枠組みを理解するために、マーサ・ロジャース博士の記述から引用してみたいと思います。“健康に対する答えは、より多くの薬、最新の技術、もっと多くの病院を建てれば良い、ということではない。”(Rogers, 1992, p.61)。健康（ケアリングと癒し）に対する答えは伝統的な医学モデルにあるものではありません。やっと私たちは違いについて理解し始めたばかりで、健康と癒し（そしてケアリング）について理解するには思考の変容が要求されます。彼女は続けて、“最新技術ばかりを強調するということは、とても重要なケアの様式をどんどん影に追いやっていくということになる。看護婦が人々を変えることはできない。むしろ、変化の起こる過程に、看護婦が知識を用いて参入すること、そして、看護婦は今日認知できる以上の癒しの可能性があることを理解しなければならない。”(Rogers, 1992, p.61)。と述べています。

ケアリングの科学と トランスパーソナル・ケアリング

ケアリングの科学は、人道主義的な側面と、ヒューマン・ケアリングの過程、現象、経験を目指す人間科学的思考の側面を包括しています。それは、臨床科学や芸術、人文科学をも含んでいます。ケアリング科学の視座は、統合性と結合性という世界的視野に基づいています。トランスパーソナルケアリング

は、生命の統合と、ケアリングを中心とする循環—個人から他者へ、地域へ、世界へ、地球へ、そして宇宙へ—の結合であると認識されています。

ケアリングの科学は、客観的—経験主義的であるばかりでなく、内省的、主観的、解釈的でもあります。ケアリングは、もともと看護学にその土壌をおき、看護科学を中心に発展した新しい領域です。最近では、他の学問領域も包括し、健康、教育、ヒューマン・サービスに関する専門領域に関連をもっています。

トランスパーソナルケアリングは、今日では、癒しの潜在能力や思考の変容を把握する一つの方法として考えられています。そして、ロジャース博士の考えに一致した、より深く、より拡大した枠組みで、健康について熟考するためのものです。トランスパーソナルケアリングは、ヒューマン・ケアリングの実践とその過程において、サイエンスとアートの両方を包括しています。

トランスパーソナルケアリングの定義

トランスパーソナルとトランスパーソナルケアリングは、看護学のケアリング科学とケアリング理論の土台となっています。トランスパーソナルとは、個人—身体—自我を超越した人間の結びつきであり、霊的精神 (Spirituality) の次元をもちあわせています。トランスパーソナルケアリングは、内面的な「生」と主観的意味との関心を伝達するものであり、他者の魂の“解釈的現象野”—つまり看護者自身のというより、その相手の言及した言葉から、その人の経験していることは、どのようなかを想像すること—の追求なのです。トランスパーソナルケアリングの結びつきは、その瞬間に十分に統合され、存在するうちに、身体—自我、時間、空間、物質を超越する容量を持っているのです。

トランスパーソナルケアリングの構成要素

トランスパーソナルケアリングは、相手の生 (生活史) に参入します。そしてそれは、そのときの看護婦の「意識」と「意図」に影響されます。看護婦としての個性と、相手の個性の双方が尊重されます。両者はケアリングの瞬間に一体になっていくものです。ケアリングの瞬間に人間と人間が結びつき相互作用が生じます。しかし、実際には、その瞬間を越えるとき、新しい「ケアリングの現象野」が創造されています。ほかに、トランスパーソナルケアリン

グの構成要素としては、誠心誠意そこに存在すること、癒し輪の中央に位置すること、心を開くことです。ケアリングの過程において大切なことは、ケアリングと癒しを行うという意図を明確に意識して、かかわっていくことです。

どのようにトランスパーソナルケアリングは表出されるのか？ケアリングの瞬間

トランスパーソナルケアリングは、ケアリングの瞬間に現れてきます。看護婦は自身の個性的な「生」 (生活史) や現象野を持って、そして全身全霊を込めて、患者の空間 (現象野) に参入します。その瞬間にトランスパーソナルケアリングは生起すると言えます。そのとき、お互いの現象野は一緒になっていきます。魂と魂のつながりがあるとき、単なるつながりを超越して、看護婦と患者の結合された現象野以上により大きく複雑な「生」の一部となります。またそればかりでなく看護婦と患者それぞれの「生」 (生活史) の一部となるのです。

もし、そのケアリングの瞬間がトランスパーソナルであるならば、それぞれがともに、霊的精神のレベルで結びついたように感じられるでしょう。そしてお互いの人間性に感銘をうけ、癒しと人間性の結びつきの可能性をより深めることができるでしょう。身体的—機械的なテクニックを介した相互作用よりも、ずっと深いレベルの結びつきとなります。

トランスパーソナルケアリングに関連する仮説

トランスパーソナルケアリングの理論には、少なくとも、次の4つの仮説的概念が含まれます。①エネルギー、②意識、③光、④新しい見方による人間。例えば、意識や思考、感情は、異なったレベルやエネルギーの強さで結びつけられています。関心をよせた愛情のこもった思考は、高いレベルのエネルギーを有しています。このため相手を癒し、静穏にして再び元気づけることができます。ところが反対に、怒りや意気消沈といった陰性の感情は、低いレベルのエネルギーしかもたず、相手をがっかりさせます。そして、相手にも低いレベルの光と意識を引き起こす要因になってしまいます。

人間・身体の新しい見解

人間に対する新しい見方とは、どういうことでしょうか。現代の西洋にみられる伝統的な人間の身

体像は、「機械的」であるということです。この機械的な身体像は、西洋諸国において最新の科学技術的医学に順応するために、ずっと受け入れられてきました。一方、西洋の身体像に比べ、中国では古来から、人間の身体像を「庭園」とみなしてきました。庭園は、エネルギーの流れとそのバランスを保つために、耕され、養われ、そしてケアされることが必要です。

それらに対して、トランスパーソナルケアリングの視座でもある最新の見方、すなわちポストモダンの身体像は光、意識、そしてエネルギーで表されます。アレックス・グレイは「聖なる鏡」という作品で、この見方を表現しています。もうひとつ、12世紀、ピンゲンのヒルドガードという人の作品をご紹介します。意識野は身体の中に属しているのではなく、意識野の中に身体が属しているように描かれています。このヒルドガードの芸術は、前近代、近代、未来的な身体と意識の解釈が統合されているように思えます。これらの観ていると、やがて、サイエンスとアートは通じているという見方に導かれます。

これらの仮説と人間の見方は、時間、空間、物質を超えるトランスパーソナルの概念をどう考えるにかかっています。そして、それはトランスパーソナルな思考の重要性を理解するための、またより高度のケアリングー癒しの様式に組み入れるための、新たなアプローチを見出すことになります。

トランスパーソナルケアリングと新しい仮説は、看護治療や看護の技、ケアリングー癒しの様式にどのように応用するのか？

ケアの瞬一瞬にも、ケアの意識はすべてそこにあります。そのため、良いも悪いも、看護婦の一つひとつの行動は、患者に影響を及ぼします。言い換えれば、看護婦のケアリングー癒しの「意識」は患者に伝わることになります。

このトランスパーソナルケアリングの理論と新たな人間の見方をすれば、どのような看護場面であろうとも、ケアをすることには意味があることになります。看護婦は意図とケアの「意識」をもって、自分の全体性を投じて一つひとつケアを提供することで、本当の意味で人間性をもつ主体として、患者の前に存在することができます。そこから、誠心誠意十分に心を向け、人間性と創造性を駆使するのです。そしてそこに心が開けるのです。ケアの瞬間において、患者との間に魂と魂のつながりのある関係が築

かれるのです。この高度なケアリングー癒しの様式は、ナイチンゲールの看護の視点と全く異なるものではありません。

これらの高度なケアリングの様式は、看護婦自身の個性を組み入れています。たとえば、動作、感覚、タッチ、音、言葉、色、エネルギー、光、自然といったことを、その人独自の工夫によって意図的に、意識的に使うのです。また、セルフケア、自己認識、セルフコントロールを促進する形態なども個性的な使い方が考えられます。これらの個性的なアプローチは、看護婦自身の内なる癒しを助けることにもなります。これらはまた、人間的に、かつ自然な環境で包む様式であって、押しつけや侵害となることはありません。安楽や静穏、疼痛緩和や、よりよい状態であると感じる気分を提供することになります。そしてまた、私たちに看護のアートと看護のサイエンスのすばらしさを感じさせることになります。

トランスパーソナルケアリング理論に基づく実践(技)には、誠心誠意そこに存在すること、瞑想、セラピューティックタッチ、想像、ユーモア、治癒的な環境、美、芸術、光、色、アロマセラピー、意識的なタッチ、動物療法、音楽、音、詩、物語、日記などがあげられます。

トランスパーソナルケアリングの再考

新しい世紀を迎え、今までお話してきた看護についての新しい見解は、世界中の人々を結びつけることができます。私たちは、この新しい看護の見方のなかで、過去から受け継がれてきた癒しの輪(生命の輪)や叡智を大切にしながら、理想に向けて意識を発展させていきたいものです。ケアリング科学の枠組みは、客観と主観、また問主観的な関係であり、アートとサイエンスとを統合したものです。

クリニカル・カリタス

トランスパーソナルケアリングモデルは、1970年代後半から1980年代中旬にかけての私のケア因子についての初期の研究を経て、カリタスのダイナミックな理論へと変化、発展してきました。“カリタス”とはラテン語で大切に、感謝する、愛情のある関心もしくは特別な関心を向ける、という意味です。カリタスとトランスパーソナルケアリングの結びつきは、愛情とケアリングが、トランスパーソナルケアリングの新しい形として、結合することを可能にします。愛情とケアリングは、自己と他者の内面的

な癒しをもたらします。そして、カリタスとトランスパーソナルケアリングは看護の源であるナイチンゲールの思想につながります。ここから発せられるメッセージは、私たちを、時間、世紀、大陸を超えて結びつけ、再び看護の「光」へ導き戻すのです。

キャンドルのともし火（儀式）： 新しい世紀へ看護の光を伝えていく

もし、時間、空間、国、世紀を超えて看護のシンボルがあるとすれば、それはナイチンゲールのランプの光でしょう。ケアリングと癒しの儀式と光は、現代の伝統的かつ機械的なアプローチを超える、もう一つの看護のシンボルとなるでしょう。トランスパーソナルケアリングは、このランプに再び火をつけて、それを伝えていくことになります。

いま、私は日本の看護に、世界を3度回ってきたキャンドルに火をともします。皆様方に、「カリタス」のメッセージを贈ります。ケアリングの火がともり、燈し継がれていきますことを願います。

私は、最後に、古代中国のことわざをご紹介しますと思います。私たちそれぞれの中にある光が、ケアリングの光と平和を結びつけている、ということをお教えしてくれているものです。

魂の中に光があれば、人に美徳がある。
人に美徳があれば、家の中に調和がある。
家の中に調和があれば、国家の中に秩序がある。
国家の中に秩序があれば、世界に平和がある。

皆様方の、お一人お一人に、この光を伝えていて頂きたいと思います。

文 献

- Okri, B. (1997). A way of being free London: Phoenix House.
- Rogers, M. E. (1992). Nightingale's notes on nursing: Prelude to the 21st century. In F. Nightingale. Notes on nursing: What it is, and what it is not (Commemorative edition, p.61). Philadelphia: J. B. Lippincott Company.